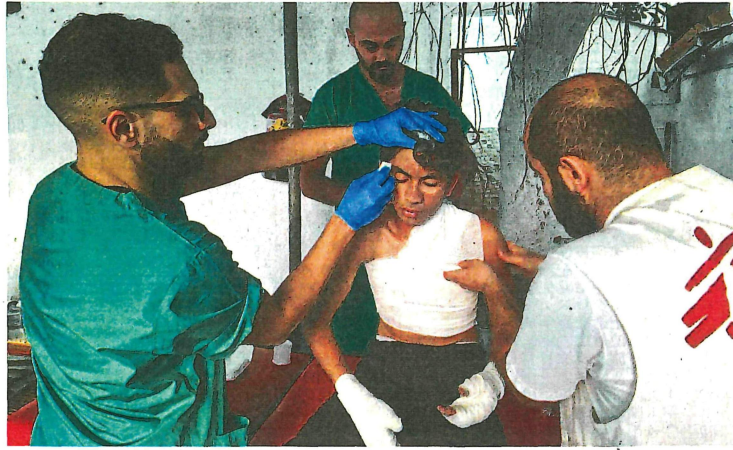


救える命も救えず



ガザ退避 白根さん

昼夜の爆撃「極限」3週間

「毎日空爆の音を聞き、水や食料が不足していく中で、命の危険を感じていた」。パレスチナ自治区ガザから退避した国際NGO「国境なき医師団」職員、白根麻衣子さん(36)は4日、報道各社の取材に時折、涙を浮かべ、「極限状態」だったという3週間の振り返った。

「車に乗せてくれ」「なんで行ってしまうんだ」。10月13日、滞在先のガザ北部から南部に避難していた白根さんは、自らが乗ったNGOの車両を追いかけくる住民らの叫び声を背に、胸が張り裂けそうにな

った。

■叫び声を背に

今年5月からガザ市の事務所で、現地スタッフとして働く医師や看護師らの採用や経理に携わっていた白根さん。戦闘が始まった10月7日朝は宿舎の自室にいて、爆音で目を覚ました。「目の前のビルの後方から、これまで見たこともない数のミサイルが打ち上げられていた」。急いで地下のシェルターに逃げ込んだが、その音は一向に鳴りやまなかった。

反撃するイスラエルの空爆は昼夜の区別なく行われた。宿舎と道路を挟んで約50メートルの建物は破壊された。イスラエルによる退避要求を受け、南部に逃れる途中も、爆撃を受けた建物を数え切れないほど見た。支援をしていた病院の近くも被害に遭っており、怒りがこみ上げた。

■通信途絶え

国連施設の屋外で避難生活を始め、南部でも空爆が続き、危険と隣り合わせの日々だった。食事は缶詰や野菜、パンでしのいだ。現地スタッフが危険を冒して調達してく

る。ガザの人口は220万人だが、そのうち150万人が自宅を追われ、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)の施設や病院、学校に身を寄せている。これらの建物は避難者であふれ、多くの人が路上で寝ているという。

深刻なのが食料や飲料水の不足で、日に日に物資は不足していった。「最後は食料が尽き、1日に1回だけ料理し、分け合って食べた」。最も不安を感じたのは10月27日、ガザの通信網が遮断された時だ。「あなたから大丈夫」と励ましてくれた母と連絡できなくなった。通信が途絶えたため、住民も救急車を呼べない。「爆撃による多くの負傷者が搬送できず、助けられる

病院 多くが機能停止

不足だ。南部や中部では、わずか9軒のパン屋が小麦粉や燃料の残量を気にかけながら営業し、人々はパンを手に入れるため、空爆が続く中で4、6時間も行列に並んでいる。イスラエルに激しく攻撃されている北部では10月8日に水の供給が止まり、地上戦によりペットボトルの水を運び込むこともできない状況だ。医療提供体制も逼迫している。入院設備がある35の病院のうち14か所、診療所の7割が燃料不足から機能停止に陥っている。

■複雑な思い

「命も救えない状況だった」中にいる時は目の前のことで精いっぱいだったが、外に出て改めて、悲惨な現状に憤りを感じるとし、「ガザでは当たり前の日々が戦争で奪われ、人間として最低限の生活も送れない。今何が起きているのかを多くの人に知ってほしい」と訴えた。

複雑な思いが交錯する中、エジプトへの入国手続きを終えた。白根さんは「ガザの」

医療物資 届かぬ26トン

ガザ地区の医療状況の改善につなげるため、国境なき医師団は医療物資約26トンを用意したが、現地には届けられていない。エジプトとの境界にあるラファ検問所を通過できる物資が大幅に制限されているためだ。

医師団によると、支援物資の内訳は、外傷患者の処置に必要な医薬品で、手術用のメスや消毒薬、ガーゼなど。「この物資も約800件の外科手術と約2万件の応急処置に充てる分ではない。届けられたとしても数日分にしかならず、無差別攻撃の即時停止が必要だ」としている。

●ガザ市内の診療所で空爆によるけがを負った患者を手当てする国境なき医師団のスタッフ。同医師団提供
●ガザの状況を説明する白根さん(4日)



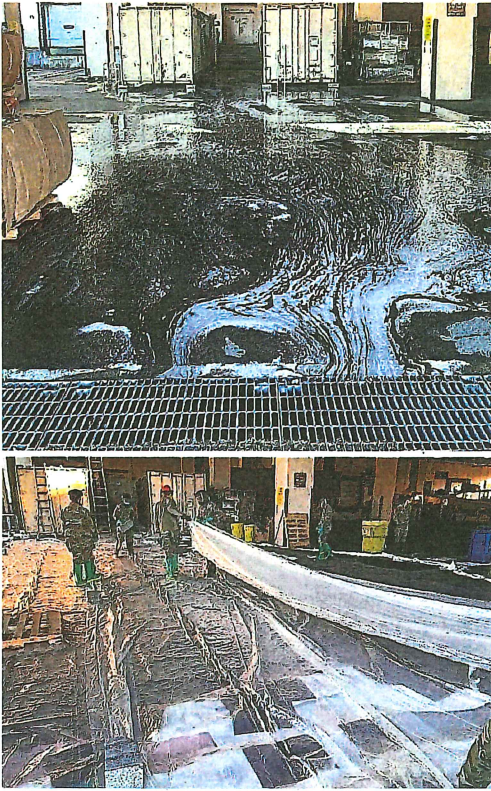
米軍、連日PFAS漏れ

東京横田基地 指針値の5万倍

【ジョン・ミッチェル特約通信員】米軍横田基地（東京都）で今年1月、有機フッ素化合物PFAS（ピーファス）入り消火剤に汚染された水が2日連続で漏れていたことが、本紙が入手した内部文書で分かった。濃度は日本の暫定指針値の5万4400倍に達していた。

1月発生 民間地から100メートル

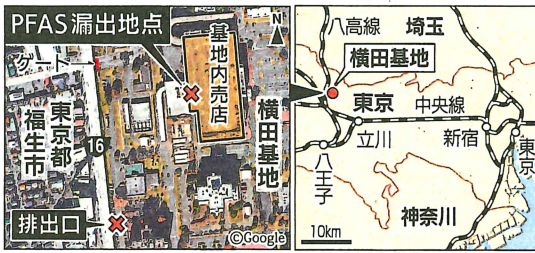
事故は1月25、26の両日、**が2日間で計760リットル**が民間地内から100メートル以内の基地内売店（PX）の外に出た。警報は作動せず、汚染水が410平方メートルの地面に広がって側溝にも流れ込んだ。内部のPFAS汚染水



万4400倍に上った。

米軍は事故後、側溝から水が基地西部の福生市側に出る排出口を吸収材でふさいだ。内部文書によると基地外への流出はなく、「基地内外の公衆衛生や健康へのリスクはない」としている。

1リットル当たりの濃度はPFOS（ピーフォス）が240万ナノグラム、PFOA（ピーフォア）が32万ナノグラムの合計272万ナノグラム。日本の暫定指針値50ナノグラムの5



④スプリンクラー設備から漏れ出し、側溝に流れ込むPFAS汚染水⑤漏れたPFAS汚染水を清掃する米軍関係者①1月、東京・横田基地

ている。スプリンクラー設備の管の中には事故後も推定9500リットルの汚染水が残っており、米軍が排出を試みたが失敗した。「原因は不明」だという。本紙が入手した事故現場の写真からは、泡を含む水が側溝に流れ込んだり、米兵とみられる人々が全面マスクを着けて清掃したりする様子が分かる。内部文書によると、清掃作業に使われた吸収材などはPFASで高度に汚染されたが、どう処分したかは明記されていない。事故現場は民間地との境界から約100メートルしか離れていない。本紙は横田基地に事故をなぜ公表しなかったのか、2日目の事故はなぜ防げなかったのか、汚染水や吸収材はどう処分したのかを問い合わせている。横田基地ではPFAS汚染水漏れが続発している。本紙がこれまで情報開示請求で入手した文書によると、2010年以降で少なくとも他に6件の事故が起きている。

出典：沖縄タイムス 2023年11月3日付

横田飛行場内における泡消火薬剤の漏出について

1. 2010年から2012年に横田飛行場内で泡消火薬剤が漏出した3件について、2018年12月の報道を受けて、2019年1月に、米側より当該3件に関する報告書を入手しました。

その後、当該報告書の内容確認を行った上で、公表可能な内容や部外への漏出に関する米側の認識について、米側に照会を行い、2022年12月に、

- ・2010年1月、格納庫における漏出、
- ・2012年10月、ドラム缶から漏出、
- ・2012年11月、保管されていた容器から漏出

したが、これら3件について、いずれも飛行場の外へ泡消火薬剤が流出したとは認識していないとの回答を得て、本年6月30日以降、関係自治体に対して、ご説明を行ったところです。

その際、詳細な情報を迅速に提供するようご要望をいただいたことから、本日、添付資料のとおり、漏出場所や漏出量等の情報を、提供させていただきます。

2. また、本年6月の報道にあった、2020年に横田飛行場内で泡消火薬剤が漏出したとされる3件についても、米側に照会を行い、今月中旬に、

- ・2020年5月、消防車両から漏出
- ・2020年8月、消防車両から漏出
- ・2020年11月、消防車両から漏出

したが、これら3件の泡消火薬剤は、原料にP F O S等を含まないものであったこと、また、飛行場の外へ泡消火薬剤が流出したとは認識していないとの回答を得て、本日、添付資料のとおり、詳細情報を説明させていただきます。

3. 今般の米側との調整に際しては、関係自治体からいただいたご要請も踏まえ、

- ①基地内の泡消火薬剤の適切な管理及び漏出の再発防止
- ②日米合意に基づく通報対象であるか否かにかかわらず、基地内でのP F O S等を含む泡消火剤の漏出についての速やかな情報提供
- ③横田飛行場を含む日本国内の全ての在日米軍施設において、2024年9月までにP F O S等を含む泡消火薬剤の交換を完了する計画について、交換プロセスの加速

を要請したところであり、今後、関連情報を地元の皆様に速やかにお知らせできるよう努めてまいります。

4. その上で、関係自治体からは、詳細な情報提供に加え、国の責任において基地内のP F A S漏出に係る地下水への影響について評価等を行うことも要望されているところ、環境省の専門家会議における検討等を踏まえ、防衛省としても、関係省庁で連携しつつ、対応してまいります。